



TITLE:

# 變革期の社會政策

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. 變革期の社會政策. 經濟論叢 1932, 35(2): 188-208

ISSUE DATE:

1932-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130213>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第

卷五十三第

行發日一月八年七和昭

## 論叢

滿洲國の財政及財政策……………法學博士 神戶 正雄  
經濟に於ける勢力……………文學博士 高田 保馬

## 時論

變革期の社會政策……………經濟學博士 石川 興二  
『購買力補給案』の諸問題……………經濟學士 谷口 吉彦  
齋藤内閣の財政政策……………經濟學博士 沙見 三郎

## 研究

總體經濟と個別經濟……………經濟學士 大塚 一朗  
ゼンエーの統一貸借對照表について……………經濟學士 熊本 吉郎  
幕末の財政紊亂について……………經濟學士 大山 敷太郎

## 說苑

勤勞所得分配の實證的研究……………法學士 毛里英於菟  
財政の社會學的根柢類型……………經濟學士 大谷 政敬

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁 轉 載）

## 時 論

# 變革期の社會政策

石 川 興 二

### 目次

一、社會變革期の政策と社會安定期の政策 二、社會政策の究極目的 三、資本主義制度の價值批判、（イ）資本主義制度の本質、（ロ）資本主義制度と現代社會惡

## 一、社會變革期の政策と社會安定期の政策

今日の日本は國內的にも國際的にも有史以來未曾有の危機に際會して居る。若し一步其處致を誤るならば、如何なる運命に落ち行くやも計り難い。此難局より日本國民を救ひ出すことは、今日まで考られ來つた諸種の姑息的手段を以てしては到底不可能である。かくて今日日本國民の前途を眞に憂ふるものは、一切の姑息的態度を捨てて根本的に現代日本の社會問題を考へねばならぬ。

今日社會問題を論ずるものにとつて先づ重要なことは社會の安定期と變革期とを區別すること

である。而してこの爲めには、嘗て述べたるが如く人間歴史の發展が本質的に辨證法的構造を有するものであることを理解するを要する。即ち社會の人々の生命は、それ自身人間の生命よりの表現であるところの一定の社會制度の下に於て、成長し行くものであるが、而も遂にこの同じ制度の下に於いては成長を續け得ざるに至る。かく社會の人々の生命が制度と矛盾に陥るに至れば、人々は既存の制度を變革し、新なる制度を實現し、以てこの制度の下に於て社會の人々の生命の發展を續けて行く。

歴史の發展がかくの如き辨證法的構造を有するが故に歴史の發展の中には二種の時期が分たれる即ち或一定の社會制度の根本原理を變革することなくそのもとに於て其社會の人々の生命が成長し行き得る時期と、一定の社會制度の根本原理を變革することなくしては最早や社會の人々の生命が成長し得ざるに至れる時期とである。前者を社會の安定期と云ふならば、後者は社會の變革期と云ふことが出来るであらう。

これと共に社會政策には制度保持的政策と制度變革的政策との二種が本質的に區別されることを要する。即ち制度保持的政策は現存の制度の根本原理を變更することなく、此の下に於て社會の人々の生命の成長を計るところのものであり、これに反して制度變革的政策は、先づ現在の制度の根本原理を變革し、人々の生命の成長に、より適當なる新な制度を現實せんとするところのものである。

1) 本誌第三十四卷第六號拙稿『現代社會問題の意義と思想對策』第六七頁以下參照。

かくて時期の別と政策の別との關係により四つの區別がなされる。即ち(一)「安定期に於ける制度保持的政策」と(二)「安定期に於ける制度變革的政策」と(三)「變革期に於ける制度保持的政策」と(四)「變革期に於ける制度變革的政策」とがこれである。今これを順次に吟味してみよう。

(一)「安定期に於ける制度保持的政策」。安定期に於ては、既存の制度の下に於て社會の人々の生命が成長し得る時期なるが故に、この制度のもとに於てその成長をはかればよいのである。今日までの資本主義制度の安定期に於ては、社會政策と云へば當然にこれが意味されて來た。

(二)「正常期に於ける制度變革的政策」は社會の安定期に於て社會制度自體を變革せんとするが故に、これは無用の變革である。

(三)「變革期に於ける制度保持的政策」は變革期にも拘らず既存の社會制度を保持せんと努るものなるが故に誤つて居る。而もこれが今日政治家及學者の多くが陷つてゐるところの最大なる缺點である。即ち今日の社會を處理しつつある政治家並にこれを論じつつある學者の多くのものは、社會の安定期と變革期との本質的區別を十分に自覺せず、従つてまた制度保持的政策と制度變革的政策との本質的相違を自覺して居ない。其結果、今日非常時の非常對策と云はるるものの殆ど總ては、制度保持的政策をもつて今日の變革期に處せんとして居るものである。例へば政府の唱へつつある農村對策、中小工業者對策、また學者が唱へつつある恐慌對策等は殆んど皆これならざるはない。社會の變革期に於ては、現存の制度の下に於て社會の人々の生命が成長し得ず諸種

の社會惡が續出しつつあるので故に、この期に於て現在の制度保持を前提とする政策を以て臨まんとすることは、不眞面目にも問題の難點を回避するものであつて現代日本の危機を益々加重する結果となつてゐる。このことは恰も病人が重患に冒され切開手術を斷行せざる可からざるに拘はらず殊更に病狀を秘して安心せしめ、姑息なる手段をもつて一時を糊塗する中に病狀が一層惡化し遂に如何ともす可からざるに至ると同様である。即ちかく社會變革期に於て先づ現代制度の變革に努めず、現代制度の保持的政策を行ひつつある間に社會の制度と社會の人々の生命との矛盾は愈々大となり行き、其極遂に人々は革命的に現制度を突破し以て生命の成長を計らんとするに至る。かくて社會は徒らに大なる犠牲を拂ふこととなるのである<sup>1)</sup>。

(四) かくて社會の變革期に於ては制度變革的政策より外に正しき道はない。このことは種々なる對策について同様である。例へば安定期に於ては思想對策は既在の社會制度を保持しこの下に於て最もよく生きて行くが爲めのものであるが、變革期に於ては現存の制度より將來の制度へ移行行く爲めのものではない。また今日莫然と統制經濟と云はれて居るが、安定期に於けるものは現代制度の保持を前提としてこの下に於てよく生きんが爲めの統制經濟であるが、變革期に於けるものは現制度より將來的制度へ進み行く爲めの統制經濟でなければならぬ。

かくて今日まで社會政策と云へば、安定期に於ける制度保持的政策のみが意味されたのであるが、むしろ廣く社會政策には制度保持的政策と制度變革的政策との二種が分たれねばならぬ。而

1) 前掲拙稿參照。

して制度變革的なるものと云へば通常非合法的革命的なるもののみが意味されたのであるが、むしろ廣く制度變革的なるものに於て、變革の様態の漸進的であると急進的であるとに拘らず其變革者が國家意志なると否とによつて合法的改革的なるものと非合法的革命的なるものの二種が分たるべきである。而して社會變革期に於て非合法的革命が現らはれるか合法的改革が現らはれるかは爲政者が徒らに既存の制度を固持せんとするか否かに拘はるのである。故に變革期に於て最も重要なことは、爲政者及學者が賢明であつて社會が變革期にあることを最も速に認識し、速に既存の制度自體の適切なる變革に向つて努力することである。

かくて現代の日本にとつて最も必要なことは、先づ現代日本の危機をなすところの諸種の社會惡が資本主義制度の根本原理より發せるものであり従つて資本主義制度の根本原理を變革せしめては現代日本の健康回復を望み得ざることを明にし、更にこの爲めにはこの資本主義制度の根本原理を如何様に、而して如何なる仕方によつて變革すべきかを明にすることである。これ即ち現代日本の社會變革期の社會政策的研究である。

ここに注意するべきことは、政策的研究に於て最も重要であり且困難なるは社會變革期に於ける政策的研究であつて、従つて本來社會政策的研究が學として成立せしは社會の變革期に於て制度變革的研究としてであつたことである。<sup>1)</sup> 即ち歴史的社會的實在の考察が初めて學となつたのは萬學の祖アリストテレスに於いてであるが、この學はギリシャ都市國家の變革期に於て實踐學と

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』(弘文堂發行)参照

して成立したのであつてその全體の研究課題をなすところのものは社會變革の四原因であつた。即ち、如何なる目的の爲めに(目的因)、如何なる所與社會から(素材因)、如何なる將來社會を(形相因)、如何なる方策によつて(動力因)、實現すべきかの研究であつた。而して經濟學はこの實踐學の一部として初めて學となつたのであるが、それが初めて一科學の學となつたのは經濟學父アダム・スミスに於てであつた。スミスの經濟學は尙中世的であつた當時の英國の社會が資本主義的社會への變革期に於て、アリストテレスに於けるが如く實踐學として成立し、中世的經濟社會よりスミスの所謂「自然的自由の體系」へ、即ち現代の資本主義的經濟社會への變革の四原因を究明したのである。而して現代の社會變革期の社會政策に於ては現代の資本主義社會より將來社會への變革の四原因が明にされねばならぬ。即ち如何なる究極目的の爲めに、如何なる現代社會より、如何なる將來社會を、如何なる方策によつて實現すべきかを明にしなければならぬのである。

これをデイルタイに於いて云へば、素材因の研究は對象把握と價值評定であり、目的因の研究はこの評價の標準の研究であり、形相因の研究は目的定立であり、動力因の研究は方策附與である。この中、對象把握なるものは理論的部分と歴史的部分とに分たれ、前者は經濟原論と云はるるものであり、後者は經濟史と云はるるものである。社會變革期の最も具體的な經濟學はこの一切を研究課題をするところのものであるが、社會變革期の社會政策なるものは少くとも經濟原論

1) 本誌第三十二卷第四號拙稿『デイルタイ哲學と經濟哲學』第二七頁以下及第三九頁以下參照。



並に經濟史の研究の結論を前提とし、他の一切の研究をするものでなくてはならない。

私はここには只現代資本主義制度の變革期の社會政策としてのこれ等の諸課題の輪廓にふれ、以て資本主義制度の根本原理を變革せずしては現代日本の危機を救ひ得ないことを明にしたいと思ふ。

## 二、社會政策の究極目的

社會變革期の政策を考察するにあつて先づ重要なことは政策の究極目的である。即ち社會が變革期にまで進み來れば、そこに於て社會の利益と考へ慣らて居るところのものは、實は特殊階級の特種利益なのである。即ち今日の社會に於ては多くの場合資本家階級の經濟的利益が全體の利益であるかの如くに主張されて居る。故に社會變革期の社會政策に於ては先づ社會の全體的利益の考方から改めねばならぬ。而してこれが爲めには先づ一般的に、次に歴史的具體的に考へなければならぬ。

先づ一般的に考ふれば、人間の社會生活の究極目的は社會善の實現と云ふことである。即ち社會の總の成員をして人間たらしむることである。このことは洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず變りない。即ち東洋に於ては『大學』に於て代表的に、大學之道、在明明德、在親民なる語によつて云ひ現はされて居る。即ち明「明德」とは人間たるの本質を發揮することであり、親「民」と

は社會の成員をして人間たるの本質を發揮せしむることである。また西洋に於ては、このことはアリストテレスに於て代表的に云ひ現はされて居る。即ちアリストテレスが人間善とせしところのものは人間をして人間たらしむるところの機能を十全に活動せしむることであり、而して社會善とせしところのものは社會の成員をして人間善を完ふせしむることである。而してこのことは社會の大小について變らない。即ち、家庭社會に於ては家庭愛であり、國民社會に於ては國民愛であり、人類社會に於ては人類愛である。而して人類歴史の究極の目的は人類愛を實現することである。

これを歴史的具體的に考ふれば、この究極目的が實現せられ得べき限度は其時々<sup>1)</sup>の歴史的事情によつて規定されて居るのであつて、この限度の最大限に於てこれを實現することが其時々<sup>2)</sup>の歴史的具體的なる社會善である。

今我國の歴史を顧みるに此歴史を一貫して社會善を擔へる者<sup>3)</sup> *Trieb* は皇室であつた。ここに我皇室の萬世一系なる所以がある。而して此社會善を實現し得べき限度は、社會の進歩と共に次第に擴められて行つた。即ち王朝時代に於ては貴族階級が、封建時代に於てはこれよりも更に廣く武士階級までが、主として人間的生活を享け得た。而も尙多くの人々は未だ人間たるの生活を享け得なかつた。明治維新に當つては明治大帝が『維新の詔』に於て「今般朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば」と宣はれしが如く、總ての國民をして人間た

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第二篇第四章參照。  
2) 本誌第三十四卷第六號拙稿第七四頁參照。

るの生活を享けしむるところの國民愛が其究極目的とされたのであるが、事實上今日尙ほ農村及都市の下層を爲せる多くの人々は只だ社會の生産的機關として生産的奴隸として生存するのみであつて、未だ人間的生活を享けて居ないのである。而して此等多くの人々が人間的生活を爲し得ざる所以は主として經濟的事情にある。然るに明治以來の資本主義經濟の發達の結果として我國全體の經濟的生産力は著しく増大したのであつて、今やこの生産力を十分に發揮せしめ國民の眞の生活に用ふるならば國民全體をして人間としての生活を享けしむるを得る可能性が與へられて居る。

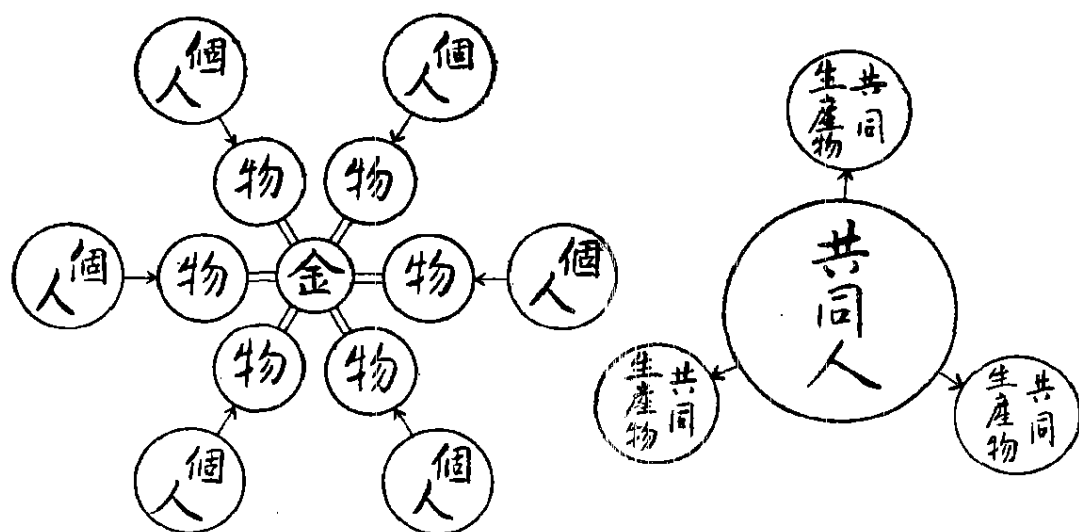
かくてこの與へられてゐる可能性を現實し、我國民全體をして人間的生活を享けしめ、人間善を發揮せしむることが、今日初めて、我國の社會政策の具體的な目的となつたのである。而して今日この目的を實現する方策が中心的に經濟的制度の變革にかかつて居るが故に、今日の社會政策論は制度變革的政策論であり、而も經濟的制度の變革が考察の中心となるのである。

### 三、資本主義制度の價值批判

#### (イ) 資本主義制度の本質

社會善なるものは本質上不變的なるべきものであるが、社會制度なるものは此社會善を絶えず實現し得る様めに本質上可變的なるべきものである。而して今日の社會政策が制度變革的政策で

1) 前掲本誌拙稿第七四頁以下參照



なければならぬのは現代の社會的諸惡が現代社會制度の根本的特徴をなせる資本主義制度の根本原理自體より發するものなるが故である。かくて現代の社會政策論に於てはこのことを明にすることが重要であつて、これ現代の社會政策論の素材因論である。而してこれが爲めには先づ資本主義制度の根本原理を明にして置くことを要する。而して資本主義制度の根本原理は資本主義制度の經濟原理的研究並に經濟史的研究を待つて初めて十分に明にされ得るものであるが、茲には只だ其一般性を、これと異なる制度の原理と對照せしむることによつて明にするに止める。

經濟社會にはそこに於て人間が結ばれて居る在り方の直接なると間接なるとによつて二つの基本型 Grundtypen が區別される。一つは左圖に於けるが如く人々が先づ直接に結合して存在し、それ等の人々の共同的なる勞働によつて其社會の人々に必要な物が共同的生産物として生産せら

れ、消費される在り方である。これに反して他は左圖に於けるが如く人々は孤立的に存在し、只だそれ等の人々の個別的勞働によつて生産されたる個別的生産物が相互に貨幣を通じて交換されることによつて、これ等の人々が間接に物的に結ばれて居る在り方である。而して後者が現代經濟制度の根本原理である。この原理に於ては人々は今日の經濟社會に於けるが如く如何に密接に結ばれて見える場合に於ても本質的には孤立的に存在し居るのであつて、只だ各人の私的勞働の私的生産物の交換關係によつてのみ間接に結ばれ社會的結合を形成して居るに過ぎないのである。このことは廣く商品生産社會の根本原理であるが、所謂資本主義制度なるものはこの根本原理に於て變りないのであつて、只だ其一層發展したる形態である。即ち商品生産社會に於て生きんとする者は自己の生産せし商品を金に代へ此の金を自己の消費せんとする商品に代へねばならぬのであるが、而も自ら商品を生産せんとする者はこれが爲めに必要なる生産手段及び生活資料の一定量を所有して居なければならぬ。今若し其人にして此等必要物を有さなければ彼は所謂商品を生産し得ざるが故に自己が供給し得る只一の商品として自己の勞働を賣ることによりて生きなければならぬ。これが即ち勞働者である。而してこれを買取るものは資本家である。即ち前者は勞働力を商品として後者に販賣し、後者は買ひ取りたる勞働力をして自己の所有する生産手段を以て所謂商品を生産せしめ、これを販賣することによつて利潤を獲得することを目的として居るところの商品生産者である。而して今日文明國に於ては最早や單純なる商品生産社會なるもの

は見られないのであつて、その中には勞働力もまた商品として買賣されて居るところの商品生産社會である。而して我々が資本主義的制度と呼ぶところのものはかくの如き經濟制度である。かくて現代經濟制度の本質は要するに商品生産社會の根本原理にあると云ふことが出来るのである。

今日資本主義經濟制度の下に生き、日々の生活が其原理によつて規定され居る現代人にとつては、この制度の根本原理が永久不變なものであるかの如くに考へられる。而してこのことは單に世間一般の人々に於てのみならず、多くの政治家に於ても、更に多くの學者に於ても事實である。今日の政治家及び學者によつて主張されつつある社會政策なるものの殆んど總てが資本主義制度の根本原理を前提とし、この下に於いて考へられて居るところのものであつて、社會變革期の對策となり得ぬことは既に述べたるが如くであるが、其の原因は重にここにあるのである。かく資本主義的社會關係を永久不變なるものであると考へる素朴なる意識より我々を救ふ爲めに最も有力なるものはデイルタイの所謂「歴史的意識」<sup>1)</sup>である。即ち我國の歴史を顧るも資本主義制度なるものは明治維新以後に西歐より輸入されたところのものである。かくて我國の長き文化史に於て資本主義制度なるものが、日本人の生活を規定せし時間は僅に半世紀程に過ぎない。また、この制度をそれより輸入せしところの西歐歴史について見るも資本主義制度は十九世紀に於て始めて十分に實現したところのものである。かくて人類の社會生活の大部分は人間の商品的間接的結合原理とは反對の直接的結合の原理に於て規定され來つたのである。この直接的結合の原理につ

1) Dilthey は Geschichtliches Bewusstsein は人間を狭き現在より befreien 自由にする云ふて居る。

いては、後に現代社會政策の現實すべき社會形相を論ずるに當つて詳にする。

### （□）資本主義制度と現代社會惡

以上に於て私は今日の經濟社會の根本原理を一應明にしたのであるが、既に述べたるが如く現代社會惡の根本原因が此經濟社會の根本原理にあると云ふことは社會政策論にとつて重要である。これ現代社會惡が資本主義制度の根本原理より本質的に發するものであるならば、現代の社會政策は、制度變革的政策でなければならぬこととなるからである。而して資本主義制度の根本原理は經濟的社會惡のみならず、廣く現代社會惡の根本原因である。以下先づ經濟的社會惡より初めてこのことを考察しよう。

現代の社會惡は先づ經濟的事象に於て總ての人々を驚かして居る。即ち今日何百萬石の米は、大なる國民の負擔をもつて政府に買上げられ倉庫に於て鼠にかまれ蟲についばまれ、そのあげく一升數錢の價格をもつて外國に賣られて居るのであるが、而もこの米を生産しつつある農村に於てすら無數の人々が飢餓に迫られて居る。また生糸についても幾萬梱が國民の何千萬圓の負擔をもつて買ひ上げられ、政府はこれを衣類以外の用途に消費し盡さんとして其方法に當惑しつつあるに拘らず、他方着るに衣類なき人々が世に少なからずある。かくの如き矛盾はひとり我國に於てのみではない。外國に於ても綿花が山と積まれて焼き拂はれつつある側に多くの人々は寒さにふるえてゐる。また牛乳が河の如くに流されつつあるに拘らず多くの子供が呑むに乳なくして死

亡しつつある。かく人間が長き歴史的發展を通じて今日までにかち得たる巨大なる生産力は今日の經濟社會に於ては、眞に人間の生活の爲めに發輝されて居ないのである。

かくの如くに生産と消費との矛盾せる不可解なる現象は、今日の經濟社會にとつて單に偶然なる事象でなく、その根本原理より本質的に發生して居るものである。即ち前述せし如く今日の經濟制度の根本原理に於ては、經濟主體は本質的には孤立的に存在し、只だ金錢的交換關係を以て結ばれて居るのである。故に生産的事情より云へばそれは無政府狀態に陥らざるを得ない。即ちそこには共同社會に於けるが如く社會全體の生産物の量及び質を社會全體の實際の必要に適合せしむべき社會的全體的意識なるものは存せず只だ各生産主體は各自の金錢的利得の見込み如何によつて其生産量を増減して居るのである。故に自己の生産物の價格の高く金錢的收入が大であると考へれば孰れも生産を擴大し、かくて生産過剩に陥る。かくて生産物の價格は著しく低くなり各生産者は其生産量を増大せしめながら反つて其金錢收入は著しく減少する。かく金錢收入が減少するに至れば出来るだけ多くを生産し販賣せざれば生活し得ざることとなるが故に、各人は益々多くを生産することとなる。而も各々が多く生産する程社會全體の生産量は膨大し生産物の價格は愈々低下し、其結果愈々多くを生産せざれば生活し得ざるに至るのである。今生産を増大せずと雖も需要が何等かの事情により減少するならば同様の結果を生ずるのである。以上の如き矛盾は今日の農産物の價格の下落と農家生活の窮迫とに於て最もよく現はれるのであつて、彼



等は働かざるが故に食ひ得ざるにあらず働いて愈々食ひ得ないのである。

今これを消費者例の事情より見れば前述せし現代經濟制度の根本原理の結果需要の支配力 the controlling power of demand<sup>1)</sup>なるものが支配する。即ち社會の生産物は、人間生活の必要に應じてではなく、需要によつて生産され消費者に與へられる。需要とは必要とは異り購買力を伴ふ必要であるが故に、たとひ餓死するまでに飢えて食を必要としつつある人々ありと雖も、その人にして購買力即金錢を有せざる限り一碗の米と雖も與へられぬのである。而も他方金錢を有するならば如何なる奢侈品と雖も社會はこれを生産しその人に與へるのである。

かくて曩に一見不可解なるかに見えたる現代社會の經濟的矛盾は資本主義制度の根本原理より本質的に生ずるのである。即ちそこに於ては一方衣食の料が多量に廢棄されつつあるは、其供給を制限して以て其價格の暴落を食ひ止めんが爲である。而も他方多くの人々が衣食にさえ窮しつゝあるは、これらの人々は衣食を欲して居ると雖も而も購買力たる金錢を有せざるが故である。

資本主義制度の下に於ては、物のみならず、労働も亦この社會の根本原理より商品として賣買せられることは前述せし如くである。而してここにも經濟的社會惡の根源がある。即ち労働者は自己の供給し得る商品たる労働の供給者であり、資本家は其購買者である。この販賣者と購買者との間には人格の形式上の平等は存するが、實質上は労働者が常に從屬的地位に立ち不利なる取引をなさざるを得ないのである。これ労働者は労働力なる商品を有すると雖もこの商品はこれを

1) Cannan; Wealth 3. ed. p. 100 以下參照

資本家に賣却するにあらざれば何等自己の生活の資とならざるものなるが故である。而して資本主義制度が發展するに従ひ資本主義制度の本質上失業者の數が次第に増大し行くと云ふマルクスの主張は、不幸にし今日各國に於て大規模に實現しつつあるのであつて、我國に於ても年々其數を増大しつつあるのである。

かく現在の勞働者が不利なる地位に立つ結果は其子孫の運命まで不合理に決定することとなる即ち彼等は十分なる教育を受けるを得ず、從つて親と同様に其勞働を商品として賣らざる可らざる運命を永久に負ふこととなる。かくて勞働者なる階級が今日見らるるが如く固定化する。このことは單に經濟的社會惡であるのみならず、最も重大なる人格的社會惡である。このことに就ては、教育に關する社會惡に於て更に考察しなければならぬ。

以上に於て、私は今日の經濟的社會惡が資本主義制度の根本原理より本質的に發して居るものであることを考察したのであるが、次に其他の社會諸惡についてもこのことを考察しなければならぬ。而して茲に一方明にして置くべきことは經濟制度なるものが、二重に人間生活を決定することである。即ちそれは一方それが生産し分配するところの富の質並に量を通じて人生を決定する。このことに就ては以上に於て考察した。然るに經濟制度なるものは他方人間の經濟的活動の仕方、方を決定することによつて人間生活を決定する。即ち今日の社會に於ては、經濟生活なるものは社會の大多數の人々の人生の最も壯なる時代を、而して日々の最も有能なる時間を充すところの

ものであるが故に、經濟生活の仕方なるものは社會の大多數の人々にとつて其人格を決定するところの根本原因となる。而して、この經濟生活の仕方なるものはこの下に於て此等の人々が經濟生活を営むところの經濟的社會制度の根本原理によつて決定されるのである。然るに既に述べたるが如く資本主義的制度に於ては人々は本質的には孤立的に存在し、私的勞働の私的生産物の交換關係により初めて物的に結ばれるのであつて物的に結ばれることなくしては生活することすら出来ないのである。故にここに於ては社會の人々の性格は利己主義的唯物主義的に規定される。従つてこの利己主義的唯物主義的色調が此社會の諸文化域を根本的に規定するのであつて、茲に現代に於ける諸種の社會惡の根本原因が存するのである。

先づ今日の教育界を見んに、このものも資本主義制度の唯物主義的個人主義的根本原理によつて決定してゐる。即ち教育なるものは、人間生活の根本であり、人間善の實現の爲めに最も重要なものである。従つて國家が國民に對する最も重要な義務であるに拘らず、現代社會に於ては教育の機會が、經濟社會に於ける商品と同じく、金錢によつて賣買されてゐる。其結果、假令如何に優れたる天分を有する者と雖も金錢に恵まれざるものは決して高き教育を受け得ない。かくて今日の社會に於ては優れたる天分を有する多くの人も、只だ貧困なる家庭に生れたるの所以を以て其天分を十分啓發する機會を與へらるることなく、そのまま一生を終り慕に葬り去られつつあるのである。このことは現代社會の最も重大なる人間惡である。かくて現代の社會は多く

の人格を無視しつつあるのであるが、其結果多くの人才を失ひ、社會自身が受けつつある精神的損失は計る可らざるものがある。世に人才少きを歎じつつある現代社會は、ここにも甚だしき矛盾を痛感しなければならぬ。

またかくの如く教育の扉が金錢の鍵によつて開かれる現代社會にあつては、より高き教育を受けんとする程、より多くの資力を要し而してより高き教育を受けたる者程より高き社會的地位に立つを得るのである故に、社會の上位より下位に行くに従つて擴つてゐる社會層のピラミッドは人々の人間としての能力の上下を示すよりもむしろ人々が支配し得たる資力の多寡を反映して居るのである。この點に於て現代社會は文字通りに物化せる社會であり、人間の社會的正義觀を裏切ること最も甚だしいのである。現代の社會がそれに向つて進むべき社會に於ては、何よりも先づこの教育の商品化が打破せられ、所謂「教育の實質的機會均等」<sup>1)</sup>が實現されねばならない。即ち教育の機會は被教育者の經濟的資力に拘ることなく、専ら其人間的能力により決せられ、従つてより高き教育の扉は被教育者のより高き人間的能力に應じて開かれ、かくて社會の人的才能の資源は残りなく開發されて社會の爲めに遺憾なく用ひられ、社會層のピラミッドは人間的能力の高さを反映するものでなくてはならない。今日多くの人々は物的資源の開發にのみ心を奪はれ人的資源の開發を充分に問題として居ないのであるが、このこと自體現代人の意識が資本主義制度によつて物化されて居ることを示すものである。

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第一七五頁以下參照。

次に今日の政治界を見んに、何人も其著しき墮落に驚かざるを得ない。而も其原因もまた資本主義制度の唯物主義的利己主義的根本原理にあるのである。先づ政黨なるものは利己主義的唯物主義的私黨として存在してゐる感さえある、世人を驚かせし幾多の政黨員の瀆職事件なるものは只だ彼らの醜行の一端の暴露せしにすぎない。従つて政黨政府なるものが、如何に「國民の爲め政治」に冷淡であるかは、社會の最も貧窮せる人々を救済する爲めの救護法を立法しながらそれが實施を二三百萬圓の費用の爲めに延期し而も他方金融資本家の爲めには蠶糸救済の名に於て數千萬圓を支出せし一事に於てもよく表はれて居る。而してかくの如き政府により農村等が今日の如き窮狀に陥るまで打すて置かれたことはむしろ當然である。今日の政黨政治のかくの如き墮落の原因が資本主義的制度の原理にあることは、政黨政府成立の基礎を見るならば一層明となる。先づ政黨を構成すべき議員選舉に於ては投票が商品として大量的に賣買されるのであるがこのことは、今日の資本主義的制度の下に於てはむしろ當然の成行きである。かくて政黨が投票なる商品を多量に買ひとることは、結局に於て自黨の議員を買取つたこととなり、この議員數の多きことによつて政權を買ひとることとなる。政黨がこれ等巨額の費用を支出する所以のものは、政權を得た時、所謂利權の處分其他によつてそれを消却して餘あるが故である。而して金融資本家が選舉費其他の巨額の費用を政黨に融通して惜まざる所以のものも其政黨が政權を得たる時其費用の數倍の利益を供されんことを期待し得るが故である。

かくの如き現代政治の資本主義的墮落はまた現代立法の資本主義的墮落として現らはれる。而して其最も露骨なるものは治安維持法である。即ちそこには皇室に對する罪と私有財産制度に對する罪とが同一條文に於て規定せられ「國體ヲ變革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知リテ之レニ加入シタル者ハ云々」となつてゐる。然るに皇室と私有財産制度とは全々矛盾せるものである。即ち皇室は日本國民の共同社會を一貫せる根本原理であるに反し私有財産制度なるものは資本主義制度の根本原理であつて明治以後歐洲より資本主義制度と共に輸入せし外來的なるものである。而して共同社會的原理と資本主義的原理とが本質上矛盾し互に他を排除するものであることは既に述べたところよりも明であるが更に後に詳論する。我々はかくの如く相矛盾せる二原理を同一條令に於て確保せんとせし政黨政治の無反省なる態度に驚かざるを得ないのであるが、而もこのことは即ち彼等の心事が、資本主義的制度に規定されて居ることを示めすに外ならぬのである。かくてこの法律に對し、資本家階級が私有財産制度の保持の爲めに手段を選ばざるものなりとの非難が存するのである。此法律が今日我國の社會運動を徒らに非合法化し、社會の健全なる進歩を防げし罪は著しいのであつて、引いては、累を皇室に及ぼす怖がある。かくて此法律は現代社會に於ける重大なる社會惡の一である。

次にこれに聯關して現代日本に於ける共同社會的精神の崩解と云ふことが問題とされねばならない。このことに對する最も顯著なる社會的事件は所謂ドル買事件である。即ち我國の有數なる

金融資本家は自己の營利の爲めに我國の金本位制を危くし國民の經濟的基礎を攪亂するに至るをも意とせず此國民の犠牲に於てドル貨を買ひ巨利を博したのである。このことは彼等が資本主義制度自體の原理によつて決定されて行動した結果であつて、此原理よりすれば自己の財産を自己の利益の爲めに用ふることは何等非難すべきことでないのである。而もこの資本主義的行爲が日本の國民的存在を危くする非國民的行爲となるのである。かくの如く資本主義の根本原理は其本質上共同社會的結合を、家庭にしる國民社會にしる、總て次第に破壊し盡さざるを得ないのである。このことは今日國際的重大危機にある我國に對し甚しき危險を意味するのみならず更に有色人種の運命より云ふも亦重大である。即ち、白人の壓迫に對して今日高まりつつある有色民族の解放運動は日本を其指導者と仰がんとして居るのであつて、有色人種を白人の壓迫より解放し各國民をしてその各々の國民性に基く諸種の文化を自由に豊富に發露せしむるところの人類の眞の自由社會を現實し以て人類社會の社會問題を解決すべき重任を今日の世界史上に於て負ふべき國民は我國民の外にないのである。かくて日本の存廢は單に日本自身の問題たるに止まらず實に人類史を左右すべき重大問題なのである。

以上に於て考察せしが如く重大なる社會諸惡が、資本主義制度の根本原理自體より發して居る今日に於ては、資本主義制度を保持しながら日本の國民的生命の眞の發展をはかることは最早や徒勞である。即ち資本主義制度は今や變革期に到達したのである。然らば日本の國民的生命の眞の發展の爲めに資本主義制度を如何にすべきであるか。稿を改めてこのことを考察しよう。